

# インド佛教への道しるべ(二)

—原始佛教—

舟橋一哉

原始佛教を初めて学習しようとする場合、どのような入門書があるか、あるいは如何なる参考書を読むべきであるか、などの点については水野弘元博士著「パーリ語文法」(山喜房佛書林)の附録Ⅱにおいて詳細にわたって紹介されている。私は、それらの入門書とか参考書などについての紹介は最少限にとどめ、長年原始佛教専攻の学生を指導してきたので、入門者が最も注意しなければならない二、三の点について述べてみたい。

インドの佛教について研究しようと思う者は、まず梵語(サンスクリット)を学習しなくてはならぬ。梵語はインド佛教を解明するための鍵であり、武器でもある。鍵がなくては「インド佛教」の扉を開けることは困難であり、いかに優秀な戦士でも、武器なしでは「インド佛教の研究」という戦いにおいて勝利をおさめることはできない。ことほどさように、梵語の習得はインド佛教の研究に必要欠くべからざるものである。インド佛教だけではない、中国佛教でも日本佛教でも梵語に関する知識が全くなくては、効果的な研究は望めない。そのために

大谷大学では、佛教学科(インド佛教とシナ佛教とを含む)の必須科目として梵語文法を課しているのである。インド佛教を専門に研究しようとする者は、更にその上に、その梵語を駆使して梵語の佛典の講読や演習に、多くの時間と労力とを費さなくてはならない。ところが同じく「インド佛教」の範囲に属しながら、「原始佛教」となると、梵語の上に更にもう一つパーリ語を学習しなくてはならぬ。一体どうして原始佛教の研究にはパーリ語が必要なのであろうか。

ここに「原始佛教」とは「初期佛教」の意味である。

「原始」という言葉は「原始人」とか「原始宗教」とか  
いわれる場合、多分に「野蛮未開の」「低級な」という  
意味が含まれているが、「原始佛教」は決して低級な佛  
教ではない。学問的にいえば、釈尊の成道から始まって、  
おおよそ根本分裂——すなわち佛教の教団が進歩派の大  
衆部と保守派の上座部とに分れた佛滅一一〇年頃——ま  
での間、約一五〇年間の佛教を指して、「原始佛教」と  
名づける。だから本当は「初期佛教」といった方がよい。  
原始佛教の研究はまずヨーロッパ人によって始められた  
が、彼等が Early Buddhism と名づけたものを、わ  
れ等の先輩が「原始佛教」と翻訳したのが、おそらく  
「原始佛教」の初まりであろう。Primitive Buddhism  
というようにいい方はあまり聞かないようである。それ  
でわたしは、「原始佛教」といいいい方は低級な佛教を  
意味するようで、好きではないが、一応ここでは慣例に  
したがって「原始佛教」としておこう。

かって「原始佛教の研究にはパーリ語だけで充分であ  
る。梵語までもやる必要はない」という意見があった。  
大正から昭和にかけての頃である。その頃、原始佛教の  
研究にたずさわっていた学者先生たちは、専らパーリ語  
を学習せられて、梵語にはあまり関心を示されなかった。

その頃またこうもいわれていた。「梵語は非常に複雑で  
むずかしいが、パーリ語は比較的簡単でやさしい。初め  
からむずかしい梵語にとり組むよりは、まずパーリ語を  
やって、インドの言葉に慣れてから梵語をやれば、労せ  
ずして梵語に入っていくことができる。だからまず初め  
にパーリ語をやるのが得策である」と。なるほどパーリ  
語は入り易く、梵語は入りにくいということはある。し  
かしパーリ語から梵語に入るといことは、どう考えて  
みても順序が逆である。そしてパーリ語だけに頼ってい  
たのでは、原始佛教の研究においても、必ずいつかはつ  
き当るところの壁がある。そういうことは、他ならぬ、  
このわたくし自身が通って来た道をふりかえってみて、  
自信をもって言い得ることである。

パーリ語はプラークリットの一種である。サンスクリ  
ットが標準語であるならば、プラークリットは方言であ  
る。前者を雅語というならば、後者は俗語である。標準  
語と方言と、どちらを先に学習するのが順序であるかは、  
言わずとも知れたことであろう。習字にたとえるならば、  
楷書と草書のようなものである。といっても必ずしも梵  
語の方が古くて、パーリ語の方が新らしい、という意味  
では決してない。かえってパーリ語の方に古い形を存し

ていることも、しばしばある。また「梵語は複雑でむずかしいが、ペーリ語は簡単でやさしい」ということについても異議がある。本当はペーリ語の方がむずかしいのである。そのむずかしさは、梵語のむずかしさとは性質がちがう。梵語はちようど豆腐を重箱へつめたような言葉で、複雑な文法によってガッチリ締めつけられていて、一分のすきもない。それはパーニニ (Panini) の文典によって、或る程度人為的に規定完成された人工語であるからである。これに対してペーリ語は、野に放たれた野獣のような言葉である。一応の文法はあるが、甚だ融通性に富んだ文法で、なかなか文法通りには動かない。曖昧な点の多い言葉である。いまもって意味のはっきりしない言葉がペーリ語には沢山ある。「前後の関係から判断すると、或は漢訳の經典と比較対照してみると、ここはどうしてもこう読まなくてはならないが、どうしてこの語がこういう意味になるか、どう考えてみてもはつきりしないと」というようなことが、ペーリ語を読んでいると時々ある。これはペーリ語が俗語であり、自然語であり、民衆語であるということから来る現象である。だから梵語は入るにむずかしいが、(あの複雑な文法をのぞいて見ただけで気が顛倒しそうになる) 入ってしま

うとそれほどでもない。これに対して、ペーリ語は入り易いが、入ってからが、まるで迷路に足をふみ入れたように、にっちもさ、にっちも動きがとれない。

それでは原始佛教の研究には、どうしてペーリ語の学習が必要なのであろうか。それは、原始經典といわれるニカーヤ (Nikaya) 「部」と訳す、ペーリ語で書かれた經典のこと) がペーリ語で書かれているからである。このニカーヤを含む大藏經は、こんにちセイロンを中心としてビルマ・タイ・カンボジア等の南方諸国に栄えているところの、いわゆる南方佛教(小乗佛教として現存するのはこれだけ) が、伝えて来たものであって、分量としては、チベット大藏經や漢訳大藏經と比較してみて、その十分の一にも達するか達しないか位のものではあるが、長い年月を経て、それらの原典がほぼ完全な形で伝えられて来ていることは、南方佛教の功績である。(なおベトナムの佛教はシナ佛教の移入であって、ここにいる南方佛教ではない。) シナに伝えられて漢訳せられた阿含經は、この南伝大藏經とは直接には結びつかないが、深い親縁関係にあると見られる。漢訳阿含經の原典は梵語であったと思われるが、それらは断片以外に纏った形では残っていない。いま漢訳阿含經とペーリ語のニカーヤと

を対照してみると、両者でほぼ一致するものは半教以上にのぼる。それで原始佛教の研究方法は、まずパーリ語のニカーヤを漢訳の阿含経と比較対照して読むということである。この場合、パーリ語のニカーヤは、パーリ原典協会(P・T・S)発行のローマ字を使うのが普通であるが、中にはタイ国皇室版の方が間違いが少ないと言って、これを使う人もある。(最近インドで出版せられたインド文字版は極めて安く入手できる。三蔵そろって二万円弱である。)そして両者の比較対照の指針となるものは赤沼智善教授編「四部四阿含互照録」(破塵閣書房)である。これはパーリ語の四ニカーヤ(長部・中部・相应部・増支部)と漢訳の四阿含経(長阿含・中阿含・雜阿含・増一阿含)とを比較対照したもので、まず初めに漢訳の四阿含経に含まれている一一の經典名を掲げて(その数は数千にのぼる、それぞれの經典と一致するパーリ語及び漢訳の經典名を出し、もし全体としては一致しないが、部分的には一致するパーリ語及び漢訳の經典があるときはそれをも掲げ、次に今度は逆にパーリ語の四ニカーヤ中に含まれている一一の經典について、それと一致する、または一部分一致する漢訳及びパーリ語の阿含経の經名を出して、両者を対照しながら読む場合、どこにその相

当經典があるのかが一目で見えて解るようにしたものである。これによってわれわれは、たとえば、漢訳の阿含経の中に、たまたま原始佛教の研究上極めて注目すべき經典のあることを発見したとき、それに相当するパーリ語の原典及び異訳の漢訳經典があるかないかを、一目で見ることができ、あるならば更にそれを参照して、そこに説かれているところの意味を確かめることもできるのである。原始佛教の研究において、第一資料となるものは申すまでもなく漢訳の阿含経とパーリ語のニカーヤであるが、これらを実際に動かして役立たせるための指令室はこの「互照録」である。ただこの「互照録」は「四部四阿含」とことわってある通り、パーリの小部にまでは及んでいない。しかし小部の中には、たとえばスッタ・ニパータ(經集、「佛陀のことば」)、ダンマ・パダ(法句)、テーラ・ガータ(長老偈)、テーリー・ガータ(長老尼偈)のように、原始佛教の研究において重要な位置を占めるものが少くない。それらについては、この「互照録」によっては漢訳の經典の存否を確かめることができないのである。パーリ語の大藏経は「南伝大藏経」という名前で、全部和訳刊行せられている。もったも「大藏経」という言葉はもともと北伝のものであって、南伝佛教では専ら

「三藏」という言葉を使う。「三藏」といえば経・律・論の三藏であつて（南伝では律を初において、律・経・論という順序をとる。「南伝大藏経」もこの順序で配列されている）、それ以外のものは入らない。南伝佛教ではそれらをまとめて「蔵外」と称している。漢訳の大藏経はこのような蔵外をも含めて「大藏経」といつていることになる。それで漢訳大藏経の称呼に順じて、ここでは「南伝大藏経」として、三藏以外に、たとえば「大史」「島史」のような史伝部に属するもの、「清浄道論」や「ミリンダ問経」のように、北伝佛教では論藏の中に含まれているものなども入れて、全部の和訳が完成した。これは昭和の大事業であつた。ただこの中には註釈類は含まれていない。（佛音の「論事註」などは例外、「論事」は註なしでは殆ど無意味であるから）漢訳の大藏経は、その中に史伝部や註釈類までも、含めて「大藏経」と言っているのであるから、「蔵」「経」という言葉をここで「三藏」「経（修多羅）」という意味よりはほとんど拵げて用いていることになる。

パーリ語のニカーヤは、何と言っても原始佛教研究の第一資料である。これを充分に読みこなさなくてはならないが、それには一応この「南伝大藏経」によるのが

早道である。しかしその和訳はときどき充分でないところがある。それ故につねにパーリ語の原典を座右において、原典を読むための参考として用うべきである。またこの「南伝大藏経」は多人数の訳であるから、人によって訳語がちがうという不便がある。同じ原語がちがった言葉で訳されているのかと思えば、ちがった言葉が同じ言葉で訳されていることもある。コチコチの固い直訳もあれば、誤訳とは言えないまでも、甚だ厳密でない意味もある。パーリ語を全然知らない者のためには、少しは難点があつても、それでも未だ意識の方が解りよいが、少しでもパーリ語の読める者が、パーリ語の原典を読むための参考にしようとするならば、直訳の方がよい。しかしいくらか直訳の方がよいからと言つても、「現見・無時・來觀」〔「現見せられたるもの」「時を隔てぬもの」「來れ見よと言わるべきもの」という意味で、釈尊の教法が現実的・即時的・実証的であることを示す語〕というような直訳では、何のことだか、とんと解り申さぬ。

この「南伝大藏経」に対して、近ごろ総索引が出版せられた（南伝大藏経総索引・丸善）。水野弘元博士の労作で、大型三冊の龐大なものである。これは「南伝大藏経」を、和訳語とパーリ語との両方から検索できるようにしたも

ので、和訳語にはペーリ語が添えてあり、ペーリ語には和訳語が添えてあるから、簡単なペーリ語の辞書としても使うことができる、まことに便利なものである。南伝大藏経の索引としては、この他にP・T・Sから出版されている原典の索引があるが、この方は総索引ではなくて、長部経典ならば長部経典だけの索引であり、乃至、法句経ならば法句経だけの索引である。けれどもこの索引も実に詳しくそして要領よくできており、ことに原始佛教の研究の中心をなす中部経典や相应部経典の索引は、使ってみて編集者の苦心がわかるような気がする。索引を上手に使いこなすことが、佛教学研究の一つのことである。

さてペーリ語や梵語を和訳する場合、佛教の術語は、従来用いられて来たような術語でもって訳すことが必要である。ところが、ペーリ語でも梵語でも、日本語で書かれた辞典を使うことが少なく、大抵は英語・独語等で書かれた辞典を使う。ペーリ語には雲井昭善教授の巴和小辞典(法藏館)があって、一応の用は足せるが、語の数が少ないので、やっぱり大きな辞典のご厄介になることが多い。梵語には梵和大辞典(鈴木学術財団)があって、現在全体の三分二ほどのところまで出版されているが、

これとても梵語の辞典としては不充分なところが多い。むしろ梵語と漢訳語・和訳語との対照表のような性格をもっている。それで英・独語で書かれた辞典のご厄介になるとき、その英語・独語をそのまま、和訳してみても必ずしもそれが直ちに佛教の術語と結びつかないことがある。例えば、*Klesa* という字をモニエル氏の梵英辞典で引いて見たとする。漢訳で「煩惱」と訳される語であるが、それにドンピジャリの訳は辞典の上には見つからない。「苦痛」とか「苦惱」とか「病氣」とかいう訳が出ているだけである。このいう点は、モニエル氏の辞典(Sanskrit-English Dictionary) においてとくに感ずることである。つまり佛教用語が無視されている場合が多い。これを補うものはエヂャートン氏の辞典(Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary)である。それで *Klesa* という字を辞典で見ても、それが「煩惱」の原語であるということが解らないときに、どうして「煩惱」という漢訳語を見つげ出すか、というと、それは翻訳名義大集(鈴木学術財団再版)を活用することであり、各種の梵漢索引を利用することである。また梵和辞典もこういう点において大いに役に立つ。いずれにしても、「煩惱」は「煩惱」と言ってもらわないと、どうも

われわれの頭にはピンと来ない。翻訳名義大集は、梵語とチベット訳と漢訳とを対照して項目別に配列したもので、佛教用語は殆ど網羅されており、最近は梵語とチベット訳からの索引を附して出版せられているから、(漢訳語からの索引は荻原雲來氏の「梵漢対訳佛教辞典」(山喜房佛書林)に附せられている)これを活用することが佛教用語に慣れる第一歩である。

ところがペーリ語を和訳する場合は、そのペーリ語を一度梵語になおして、その梵語に相当する漢訳語を見つけて出さなくてはならない。ペーリ語を直ちに漢訳語に結びつけることはできないからである。ペーリ語を学習するのに梵語が必要である、と言ったことには、こういう理由もあったのである。ところでペーリ語を梵語になおすには、ペーリ語の辞典に、そのペーリ語に相当する梵語が記されていることが多いが、しかし梵語を当てることに、多くの問題をかかえているようなペーリ語も少なくない。しかしそういう語は、多くの場合、いわゆる「佛教用語」というようなものではないから、このことに——佛教用語をもって訳すということに——それほどこだわらなければならない。

ところが梵語やペーリ語を和訳する場合に、佛教用語

をもってこれにおきかえるだけで、そのことについてそれ以上深くつき込んで理解しようとしなくて、「わがこと成れり」というように考えるのは宜しくない。例えば *sanskāra* という字が出て来たとする。これは佛教用語で「行」と訳される語であるが、これを「行」と訳しただけでは不十分である。なるほど *sanskāra* は「行」にはちがいないが、「行」という字にはいろいろの意味があつて、一義的に理解することができないからである。

それではいまの場合の「行」は、どういう意味であるかということまで考えて見なくてはならない。「行」と訳しただけでは、理解がうわすべりしてしまつて、訳した本人は解つたつもりになっているが、それはただの「つもり」であつて、本当は解つていない場合が多い。そういう点を反省せしめられるのは、梵英・梵独等の辞典に出て来る英語・独語等による訳し方である。「行」という字をどう英訳するか、というときに、その字の表わす意味を適確に把握しなければ、英訳は不可能であるからである。*sanskāra* を「行」と訳して解つたように思っているのは、ムードに酔っているようなものであつて、さめて見ると何もわかつていなかったということになる。だから佛教の術語は、従来用いられてきた漢訳の術語を

無視しないで、しかもその言葉がそこで表わそうとして  
いる本当の意味を、適確につかむことが必要である。で  
きれば両方の訳を出して、一方を括弧に入れておくのが  
よい。例えば *sanskara* という字が、ここでは「形成  
力」というような意味で用いられている場合、「形成力」  
と訳しただけでは、佛教用語を全く知らない人にはそれ  
でよいかも知れないが、少しでも佛教に触れ、梵語をか  
じった者には、それが *sanskara* の訳であるということ  
を知らせるために、「行」という訳も併せて記す親切さ  
が欲しいものである。最近の出版物を見ると、そういう  
ふうに記す傾向が見られる。喜ばしいことである。

わが国において原始佛教の研究に花が咲いて、甲論乙  
駁、文字通り蘭菊その美を競ったのは、大正の終りから  
昭和の初めにかけてであった。その中で和辻哲郎教授の  
「原始佛教の実践哲学」(岩波書店)が出版せられ、当時  
の学界に大きな破綻をなげかけた。これは西洋哲学の方  
法論をもって、原始佛教の教理を説明しようとして試みたも  
ので、今まで佛教學者にのみゆだねられてきた佛教研究  
を、共通の広場である学問の場に引き出すことにおい  
て、大いに見るべき効果があった。この書物は今日にお  
いてもなお、名著の名に慚しないものであって、原始佛

教の研究に志す者が、必ず一度は読まなくてはならない  
書籍の一つである。和辻教授はこの書籍の中で、従来の  
原始佛教の研究をさんざんにこきおろしたが、その場合  
非難をまともに受けたのが、木村泰賢教授の「原始佛教  
思想論」(丙午出版社)であり、それと同じ線上にあるの  
が赤沼智善教授の「原始佛教の研究」(破塵閣書房)「佛教  
教理の研究」(破塵閣書房)である。これに対して和辻  
教授の立場に最も近いのが宇井伯寿教授の「印度哲学研  
究」(岩波書店)第二卷、第四卷である。ちよつと見る  
と、和辻・宇井両教授の研究は新らしく、木村・赤沼両  
教授の研究は古いように見えるが、しかし必ずしもそう  
ではなく、両者それぞれの長所もあれば短所もある。前  
者は専ら合理主義の立場に立って、原始佛教の教理を論  
理的に究明しようとする。なるほど、理屈としてはそう  
いうことになるであろう。たしかに「いや」と言えない  
ものがそこにはある。しかし二千五百年以前のインド人  
が、バラモン教に代って佛教を宗教として受け容れた、  
すなわち古代インド人の宗教的要求が、それによって満  
たされたところの佛教が、はたしてそういう態のもので  
あったかどうか。そういう面から考えていうと、木村・  
赤沼両教授の研究にも捨てがたいものがある。赤沼教



授は「十二因縁の伝統的解釈」（『原始佛教の研究』所載）を書いたために、伝統的な縁起説の支持者のように見なされてしまって、だいぶ損をしている点がある。しかしこの論文は決して伝統説を無条件で支持することを示したものでもなく、またそれ以後の赤沼教授の説の変遷の跡をたどってみても、（『阿含経講話』など）伝統説にはかなり批判的である。これらの先輩の残された業績は、今日に至るまでも学問的命脈を保っており、これらを併せ読むことによって、そこに批判的に自分の立場を

確立することが必要である。そういう意味で書いたのが拙書「原始佛教思想の研究」（法蔵館）である。水野弘元教授の「原始佛教」（平楽寺書店）は解りやすく書かれているから、一番初めに読むとよい。前田恵学博士の「原始佛教聖典の成立史研究」（山喜房佛書林）は、教理の面には余り触れないで、専ら經典の成立についての側面を探究したもので、この方面においては画期的な成果を上げた。一読に値する。